

# 琉球大学学術リポジトリ

## 新科目「公共」における「在り方生き方教育」の実践と課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2022-05-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 晏梨 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002017971">https://doi.org/10.24564/0002017971</a>

## 新科目「公共」における「在り方生き方教育」の実践と課題

The Practices and Problems of ‘Well-Being and Way of Life Education’ in Public ( *KOUKYOU* ),  
New Subject of Civics Education in High School

吉田 暁梨  
Anri YOSHIDA

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻

### 1. はじめに

若い世代が早く選挙権を持つことで社会の担い手であるという意識を持ち主体的に政治に関わる若者が増えてほしいという狙いから公職選挙法が改正された。高校生のうちに主権者として社会に参加するために必要な知識と適切な判断力を身につけ、社会的課題に対して適切に判断し解決する力を身につけることを目的に、平成30年の学習指導要領改訂によって公民科の「現代社会」に代わる必修科目として「公共」が新設された。

昨今高校公民科の授業では、主体的・対話的な学習を活用して一人ひとりの考える力を育むことを目的とされているが、多くの教師は膨大な量の基礎的内容を押さえる「知識の定着型授業」に日々追われ、「社会参画を意識した在り方生き方教育の授業」を行う時間がなかなか取れていないのが現実である。実際、筆者が受けてきた公民科の授業も大学共通テスト突破のための知識定着型授業であった。しかし「公共」の授業で扱うテーマは社会参画を意識した現代的テーマが含まれており、いずれも高校生が自らの人生を切り拓いていくにあたって、すぐにでも考えなくてはならない課題ばかりである。

中央教育審議会(2016)は、社会を生きていくために「予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を発揮し、より良い社会と幸福な人生の創り手となっていけるようにすることが重要である」と示した。これについてベネッセ教育総合研究所(2020)は「進路選択においても、自分の人生に主体的に向き合うことが今後一層求められるが、そこで鍵となるのが、新学習指導要領の総則等にも示されている、自己の『在り方・生き方』を考えること」であるとした。これから時代に生きる生徒に求められる力を十分に理解した上で「公共」における「在り方生き方」教育の指導案や教材の提供ができれば、限られた授業時間で生徒の実態や理解度に応じて「在り方生き方教育」に関する指導や実践の一助となることが期待できる。そこで、高等学校公民科「公共」において「現代社会に生きる人間としての在り方生き方」に関する自覚の涵養に繋がるような「在り方生き方教育」を実践し、その成果と課題を明らかにしたい。

### 2. 研究の構想

#### (1) 研究仮説

高校公民科「現代社会」における「現代社会と人間としての在り方生き方」の実践において、生徒の実態把握から生徒が自分ごととして考えることができるような「切実な問い合わせ」を選定し、学習内容が深まって生徒の本音が飛び交うような「支持的風土の醸成」の工夫を行うことにより、生徒の将来に活ける在り方生き方教育の授業を作ることができる。

本研究において「在り方生き方教育」は、高校公民科「公共」において公民としての資質・能力の育成に繋がる、「現代社会に生きる人間としての在り方生き方について深く考えることができるような教育」と捉えたい。「在り方生き方教育」を行うにあたり、生徒が課題に対して主体的に取り組むため

## 吉田：新科目「公共」における「在り方生き方教育」の実践と課題

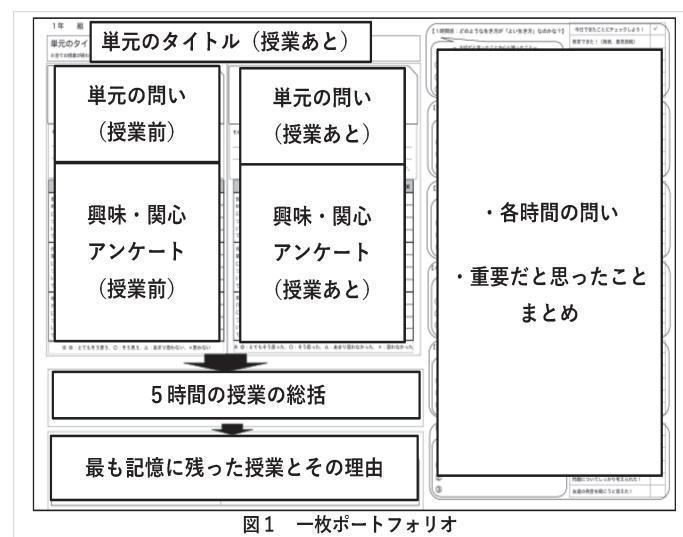
には、その課題が生徒にとって「切実性を感じる課題」であることが重要である。伊藤（2003）は、生徒一人ひとりの価値観が異なる中で「生徒一人ひとりに学ぶ動機の『切実さ』あるいは学ぶことへの動機づけをどのように認識させるのか」への検討が重要であると述べている。その効果について森永（2018）は、「このままだとどうなってしまうのだろう」などといった切実感のある問いを加えていくことで子供の社会的事象への関心を高め、さらには自分ごととして学習に取り組んでいくことができると言っている。つまり、授業構成の上で最も重要な「問い合わせ」は生徒から出されたもの、もしくは生徒が持つ「問い合わせ」を活用したものである方が好ましいといえる。今回研究実践で取り組む「在り方生き方教育」は、生徒自身が自己対話を通して自分なりの納得解を出さねばならない学習であるからこそ、切実感がなくては深まらない授業となってしまう。本心から「この課題を解決したい」と思えるような課題設定であれば、課題解決策を考察するにあたって「自分はこう在りたい、生きたい」という自らの在り方生き方への自覚の涵養に繋がると考える。生徒が自分の考え（在り方生き方）を自覚して更に深化させるために他者の意見や考えはとても重要な役割を果たすが、そのためには生徒一人一人がしっかりと自分の考えを持つ必要がある。しかし安心して自分の考えを持ち、自分の考えを表現するためには、先に述べた「切実性を持てる課題設定」はもちろん、その生徒が属する学級の「支持的風土の醸成」が不可欠である。なぜなら生徒が本音の意見を出せるような風土がなくては生徒の在り方生き方の自覚は言うまでもなく、授業も成り立たないからだ。

**(2) 研究仮説に迫る具体的な手立て（授業づくり）**

- ① 授業前アンケートとネット上匿名チャット機能「Live アンケート」を活用して生徒の悩みや疑問、幸福観や死生観を調査し、生徒が授業内容で自己の「在り方生き方の自覚」に迫るために必須である「切実な問い合わせ」を設定する。
- ② 生徒が本音を言えるような支持的風土醸成のために、発表してくれたコメントに対して自己の意見の有効性に気づいてもらえるような声かけを心がけて行う。
- ③ 生徒の実態把握をもとに思考が連続していくような単元構成を意識し、興味・関心を持って取り組むことができるような教材の工夫を行う。授業では、「自分の考えを持てる場面」と「考えを表現する場面」、「自分の考えと他者の考えを比較する場面」の3場面を意識して取り入れ、二つ目の場面ではリアルタイムで共有できるよう、「Live アンケート」を活用する。

**3. 研究の実際****(1) 授業前アンケート**

実習校の沖縄県立A高等学校における公民科「現代社会」の授業にて「在り方生き方教育」を行い、1枚ポートフォリオ（図1）の記述から「現代社会に生きる自己の在り方生き方」に関する自覚の涵養の効果を検証した。加えて授業前アンケートや「Live アンケート」での生徒の意見から生徒の経験や倫理観を調査し、教材研究に活かした。教材づくりにあたり、生徒の実態と興味・関心のあり様を的確に把握する目的で全クラスの生徒にアンケート調査を行った。その中の質問項目の一つ、「あなたが社会科の授業で『面白いな』と思ったことのある分野はどれですか」



について6項目（日本史・世界史・地理・政治経済・倫理・わからない）から選択してもらった結果は、歴史的分野に興味・関心がある生徒が全体230人中92人（40%）、地理的分野は37人（16%）、公民的分野は23人（10%）、わからない・無記名は78人（34%）であった。この点から、生徒が興味・関心を持って取り組むことができるよう歴史的人物に焦点を当てる形で教材研究を行った。具体的には、先哲の人生史やその時代背景などを授業に取り入れるよう心がけた。単元づくりについて、生徒にとって初めての倫理的要素を含む授業となるため「生徒の思考（単元の流れ）に連続性があること」を意識し、授業の終わりには全ての思考が繋がって総括が出せるような授業の流れを工夫した。生徒が切実さを感じて学ぶことができる「問い合わせ」を選ぶため、第1時で全クラスの生徒に質問紙調査を行った。質問のテーマは「あなたの悩みについて自由に記入してください」とした。すると生徒からは「自分に今後どんなことができるのか」「将来が不安」「人間関係が難しい」「自由気ままに生きたい」「決めたことを最後までやり遂げることができない」といった自分の在り方生き方や他者との関わり方にに関する悩みが出てきた。また「自分の性格や見た目、周りからの目や評価」「差別」といった悩みからは、生徒は常に周りの意見や視線を気にして些細な言動にも敏感であることがわかった。自己の在り方生き方を考えることで、自分の人生に主体的に向き合うことができるようになり、その力はこれから生きる社会で予測できない変化に主体的に向き合い関わり合って解決する力へと繋がる。つまり生徒の悩みをテーマにした「在り方生き方教育」を行うことで、生徒は自己の在り方生き方についての自覚を涵養できるだけでなく、これから社会を生き抜く力を身につけることができる。さらに生徒の悩みは生徒にとって解決したいと望む切実性を持つものであるので、学習意欲や興味関心の向上にも繋がると考えた。そこで筆者は、生徒の在り方生き方に関する悩みに関係するテーマを扱う「在り方生き方教育」こそ、自己の在り方生き方の自覚を明らかにすることができると考え、単元の問い合わせを「自分にとって『よい生き方』とはどのような生き方だろうか」とした。

## （2）単元計画

生徒は単元前と単元後の授業で、この問い合わせに対する考え方を1枚ポートフォリオに記入し、5時間の授業で生徒が「現代社会に生きる自己の在り方生き方」の自覚の涵養に繋がるような「問い合わせに対する自分なりの納得解を出す」ことを目指して授業を構成した（表1）。なお、本来は4時間目となるはずであった「③近代の西洋社会に見られる考え方」については授業数の関係により割愛してある。

表1 単元の概要

【単元の問い合わせ】 あなたが思う「よい生き方」とはどのような生き方だろうか。			
時	学習内容	目的	授業形態
つ か む 1	【本時の問い合わせ】 自己紹介/授業中のルール確認/授業中使用する機器接続/ 生徒の悩み	「幸せ」とは何か。 ・教師の自己開示を通して、生徒に興味を持ってもらう。 ・生徒の悩みを教師が把握し、教材研究に役立てる。	対面
学 ぶ 2	【本時の問い合わせ】 ①豊かな人生を求めて (教材) ソクラテス、孔子、老子、莊子	どのように生き方が「よい生き方」か。 哲学について理解し、現代に残る先哲の考える「よい生き方」を人生史とともに学び、自己の「在り方生き方」を再考する。	オンライン
3	【本時の問い合わせ】 ②日本の伝統的な考え方 (教材) 法然、親鸞、日蓮、栄西、道元、林羅山、伊藤仁斎、本居宣長、夏目漱石	「生」や「死」とどのように向き合えば良いのか。 日本人の伝統意識を理解し、日本の先人たちが考える「よい生き方」を時代背景とともに学び、自己の「在り方生き方」を再考する。	オンライン
4	【本時の問い合わせ】 ④近代市民社会から大衆社会へ (教材) ベンサム、J.S. ミル	社会にとっての「よい生き方」とはどのような生き方か。 人によって幸せの重要度合いの捉え方が異なることを理解し、社会にとっての「自己のよい生き方」を再考する。	対面
5	【本時の問い合わせ】 ⑤他者とともに生きる (教材) マザー=テレサ、マララ=ユスフザイ、ガンディー	あなたは誰のために生きるのか。 自己と他者は互いに不可分の関係であることを学び、自己の「在り方生き方」が社会を作り上げていることを知る。	対面
6	【本時の問い合わせ】 ⑥豊かな社会の実現に向けて (教材) キング牧師、ソーシャルスタイル診断	全ての人が幸せに生きるにはどうすれば良いのか。 公平で平等な社会の実現には、固定観念に囚われない柔軟な心を持つ必要があると理解し、自己分析を通して他者理解に繋げる。	対面
ま と め 7	【本時の問い合わせ】 1枚ポートフォリオ/先生へのお手紙	あなたの考える「幸せ」とは何か。 自己の在り方生き方に関する自覚を表現する。	対面

#### 4. 授業の実際

- ① 期間 2021年9月6日から10月5日
- ② 対象 実習校：沖縄県立A高等学校 1学年7クラス（計245名）
- ③ 単元名 第2編 現代社会と人間としての在り方生き方/第7章 民主社会に生きる倫理
- ④ 教科書 『高等学校 改訂版 新現代社会』pp.168-181, 第一学習社

実習校1学年の7クラスにて「民主社会に生きる一人の人間としての在り方生き方教育」を「現代社会」の授業で行った。本単元は哲学的要素や倫理を扱う範囲であり、先哲の考え方や倫理観、人生史を踏まえ「自己の在り方生き方」について哲学した（表1）。実習校はBYOD（Bring Your Own Device）研究指定研究校ということもあり、生徒は自分のデバイスで「Liveアンケート」にアクセスして意見共有を行った。なおデバイスを持っていない生徒には学校から貸出されるノートパソコンを使用した。実習中に新型コロナウイルス感染症蔓延防止策として沖縄県独自の緊急事態宣言が発令されたことから、第2、3時は「オンライン授業」や「分散登校による対面授業」で実施した（2021年9月9日～24日）。第1時と第4～7時は「通常50分対面授業」で実施した（2021年9月6日～8日、9月27日～10月5日）。

##### （1）第1時の詳細

実習生が生徒と関わるのは、短い実習期間に限られている。今までの実習先での実践を通して、生徒と触れ合う時間取ると取らないとのでは、生徒が授業に臨む姿勢に大きな差を感じた筆者は、生徒との信頼関係を築くきっかけづくりとして教師の自己開示を行った。筆者の人生史と好きなものの紹介を写真でまとめた「100秒スピーチ」を使用して生徒との顔合わせで自己紹介を行うと、生徒の筆者を見る目が徐々に変化した。さらに、考えを深める授業には全ての生徒が意見を共有できるような支持的風土の醸成が必須であることは先に述べたが、そのための方法として筆者が作った「授業のルール3点」を提示し、ルールに協力してもらうよう伝えた。その際、教師の価値観の押し付けとならないよう伝え方には細心の注意を払った。ルールは①自分の意思表示の1つとして、理解できた場合にはうなずくこと、②呟きが全体の学習を深める重要なものであること、③どんな意見も学びに繋がる有効なものであることを理解し、威圧的な反応や否定的なコメントは避けることを意図して作成した。これを提示してからは、生徒が遠慮なく授業中感じたことを述べてくれるようになったため、共に深化した授業を円滑に作り上げることができた。授業の進め方について、今まで教科書から穴埋め問題プリントの答えを探して埋めていく形式の授業を受けてきた生徒にとって、社会科授業でのICT機器を活用した授業形態は初めてのことであった。そこで、生徒には新しい授業スタイルに慣れるため実際に生徒自身のデバイスを使用して「Liveアンケート」に接続し、実際に体験させた。「Liveアンケート」は、匿名かつリアルタイムで意見をクラス全体に共有することができるため、生徒にとっても好評であった。また、ワークシートに書くことが苦手な生徒が「Liveアンケート」には入力してくれるなど、意見の表現方法の選択ができる点が困り感を持つ生徒には有効であった。最後に、授業内容に関する導入として「あなたの思う『よい生き方』とは」について考えてもらい、1枚ポートフォリオに記入させた。

##### （2）第2時、第3時の詳細

この時間はオンライン授業となったクラスが多く、授業で使用するパワーポイントスライドに音声を録音した動画をYouTubeサイトに限定公開でアップロードし、生徒に見てもらう形で学習に取り組んでもらった。授業は生徒間のやりとりではなく、授業者主体で説明をする場面が多かった。動画構成は、授業前半に教科書内容の説明（先哲の人生史と思想）を行った後に、ワークシートに先哲の考え方を簡単にまとめ、1枚ポートフォリオに授業の感想を記入するという流れで行った。

##### （3）第4時の詳細

本時は「幸せ」といった抽象的な概念について功利主義から学んだ。抽象的で難しい内容だったということもあり、初回のクラスは興味・関心が薄れたり理解が追いつかなかったりする生徒が多く見られた。そこで、生徒の興味・関心につながるような導入と授業内容の解説方法に工夫を加えるなど授業案の修正を繰り返し行った。授業は次の①～⑦の手順で行った。

- ① 導入についての生徒の回答を「Live アンケート」で共有（5分）。
- ② パワーポイントスライドで教科書内容の説明（10分）。
- ③ 先人の考える「よい生き方」についてまとめ、分かりやすい言葉で付箋に書いてグループで1つの画用紙に貼り付けてまとめる（15分）。
- ④ 「Live アンケート」で自分の書いた意見を共有（2分）。
- ⑤ 本時のまとめ（1分）。
- ⑥ 授業で大切だと思ったことや心に残ったことを1枚ポートフォリオにまとめる（7分）。
- ⑦ 授業の感想を「Live アンケート」で共有（3分）。

特に手順③では生徒の実態をより具体的に把握することができた。担当教諭は生徒の実態を「コミュニケーションの取り方と文章での表現が苦手な生徒も多い」と述べていたが、実際に授業を通して（まだ授業に慣れていないことが要因であったかもしれないが）多くの生徒が考えや意見をまとめたりグループ内で共有したりすることが難しい様子であった。書けていない子は一人で悩み、書いている子は一人で黙々と付箋に書き込んでいくという沈黙の時間が続いた。そこで、机間巡回の際に、意見を書けている生徒に対して、「この意見、よく思いついたね！」「すごい、これは先生は思いつかなかったな」「そうそう！この表現いいね、面白い！」など自己の意見の有効性に気づいてもらえるような声かけを心がけて行った。すると生徒は「なんでもいいの？」と「何書けばいいの？」と質問してくれるようになり、難しい内容ながらも書いて表現することにチャレンジしてくれるようになった。沈黙が続くグループでは、「無理にグループで一つの意見にまとめなくともいいよ」と伝え、一人一人の意見が唯一無二の貴重なものであるので、それを視覚化する目的で画用紙に貼り付けていることを伝えた。すると「頭が悪いからわからない」と言っていた生徒が「思いつきでもいいなら」と言って、まとめた意見を書いて貼り付けてくれる様になった。自分の意見の有効性に気づいてからは、生徒一人一人が書いてくれる様になり、手順④でも意見がたくさん出る様になって授業が深まった。授業終わりの手順⑦では、「みんなの幸せについて聞くことができてよかったです」、「みんな違った考え方をしていて面白かった」といった視野の広がりに関するコメントに加え、「幸せの量と質どっちが大事かというのはどんな幸せかによる」といった幸せの概念について言及するコメントも見られ、思考の深まりを感じた。

#### (4) 第5時、第6時の詳細

本時では、近現代に生きる「誰かのために生きた」人々について学んだ。授業構成は第4時と大きくは変わらないが、③の付箋にまとめる際にデバイスを活用して調べる活動を取り入れた。すると、教材として扱った人物の知名度が高く中学校での既習事項であったこともあり、生徒はとても興味関心がある様子で沢山の情報を調べ上げてくれた。よって、③を書き出す際には、多くの意見が挙がっていた。また、普段授業に参加しない生徒や意見を書き出さない生徒が、付箋に登場人物の似顔絵を描いていたので、それに対して「すごい！上手だね！」と褒めることでその生徒が授業に参加してくれるようになった。教材で扱った人物についてネットを活用して調べる姿も見られ、「Live アンケート」にも書き込みが見られた。

#### (5) 第7時の詳細

本時では、導入で第1時の導入と全く同じ質問「あなたが思う『よい生き方』とは？」についての意見を「Live アンケート」に入力して共有した。すると、第1時では何も意見が出なかつたが、第7

時ではさまざまな意見が出ていた。「幸せ」の具体例には自分の視点のみから出された「幸せ」に加え、「誰かが幸せであること」といった「他者の幸福が自分の幸福である」とする意見が出ていた。その後、1枚ポートフォリオのまとめ部分を記入して回収し、それぞれの意見を「Liveアンケート」で共有した。最後に「先生へのお手紙」として自由に感想を記入してもらった。

## 5. 授業の結果と考察（※以下、生徒の声は原文ママ）

### (1) 1枚ポートフォリオの内容分析

有効なポートフォリオ63枚の「あなたが思う『よい生き方』とは」についての授業前と後の回答を、A.他者を意識しない生き方、B.他者を意識した生き方、C.社会秩序を重視した生き方、X.わからない、Y.無記入として分析した。「書き方」とは回答の書き振りを示し、a.抽象的な内容、b.具体的な内容である。「授業関連」とは授業後の考えに授業内容を踏まえた考え方が含まれているかどうかであり、含まれている場合は○、含まれていない場合は×とした。項目ごとの回答に多く見られたキーワードを抽出してその人数を示した（表2）。

表2 「あなたの思う『よい生き方』とは」についての授業前と後の回答

授業前			授業後			キーワード
生き方	書き方	生き方	書き方	授業関連		
A	46 a 20 b 26	16 a 4 b 12	○ ×	9 7	幸せの概念（8）、自分本位（1）	
B	8 a 3 b 5	42 a 3 b 39	○ ×	42 0	他者の存在（16）、幸せの概念（13）、価値観の尊重（5）、差別（5）、愛（3）	
C	6 a 3 b 3	4 a 1 b 3	○ ×	3 1	命の大切さ（1）、差別（1）、正義の概念（1）	
X	2	0				
Y	1	0				

生き方の記述について、授業前にはAに関する生き方がよい生き方であると考えていた生徒が46人と最も多かったが、授業後には16人に減少した。特に大きな変化が見られたのはBに関する生き方で、授業前に比べて授業後には約5倍以上に増加した（8人から42人へ）。回答の書き振りについて、授業前はaの生徒が合計26人いたが、授業後は合計8人へ減少した。一方bの生徒は、授業前に34人いたが、授業後は54人に増加した。また、授業前にX、Yと答えた生徒は授業後には何かしらの自分なりの考えを持てるようになっていた。授業との関連については、A、B、Cともに○の方が多く、Bと述べたすべての生徒は授業を活用した上で自分なりの考えを示すことができていた。その中でも

「他者の存在」から価値観を尊重する大切さを感じ、「幸せの概念」について教材を踏まえて深く内省することができたといった記述が多く見られた。これは授業内容に切実感を感じ、自分ごととして課題について考えることができたためであると考えられる。一方で、授業内容を活用できていない生徒や授業前と後で記述に全く変化がない生徒がおり、一定の生徒には他人事と同様であったと評価せざるをえない。また、「普段の現代社会と少し変わったプリント多めの授業で答えのうまい授業だった」と述べた生徒は授業前後でAのままであったことから、普段と異なる授業スタイルに混乱したり意欲の低下に繋がったりすることも考えられる。抽象的な概念について考えることに意味性や必要性を感じない生徒にこそ、しっかりと目標の提示と身に付く力の提示が必要だと感じた。

次に、生徒が授業後につけた「单元のタイトル」は表3のような結果になった。「生き方や人生」をテーマとしている生徒が第一に、「他者との関わり」をテーマとしているものが第二に多かった。テーマ別に心に残った授業についてみると、4、5、6時間が心に残ることが多かったことがわかる。5、6時間を選んだ理由について「出てきた人3人の人は、他人のために人生をかけ、たくさんの人たちを救って本当にかっこいいなあ！と思ったから」「差別は今でもあることだし、すごく考えられると思いま

表3 授業終わりに生徒がつけた単元名（授業のタイトル）

カテゴリー	人数	心に残った授業						記述抜粋（原文ママ）
		6時間目	5時間目	4時間目	3時間目	2時間目	1時間目	
生き方、人生	29	6	12	5	0	1	5	自分らしい生き方、自分の人生のための授業、生き方を考える、よい生き方とは
他人、社会、関係	10	3	3	2	0	0	2	自分と周りの人々との関係、他人や社会との関わり方、他者との関わり方と生き方
幸せ	6	4	2	0	0	0	0	みんなが幸せになるには、幸せな生き方、誰もが平和で幸せに生きる、幸せの一つの考え方
価値観	5	0	3	2	0	0	0	価値観の授業、色々な考え方、人それぞれの考え方と生きがい
偉人、歴史	4	1	2	1	0	0	0	偉人たちの生き方、歴史の動かし方、有名ないい人を勉強する
差別、平等	3	1	1	1	0	0	0	生き方と差別、差別のない幸福な人生とは、公平でびょうどうで自由
命	2	0	1	1	0	0	0	命の大切さ、「生きる」という言葉の重み
愛	2	0	1	1	0	0	0	愛を持って愛を大切に！、幸福や愛について学ぶ
家族	1	1	0	0	0	0	0	人間は家族
哲学	1	0	0	1	0	0	0	てつがく
世界	1	0	1	0	0	0	0	世界の生き方

ました。みんなで差別をなくしたい」「家族以外との関わり方を知れた気がする。また、他人に優しくできるマザーテレサが素晴らしいと思った」などがあった。このことから、身近な課題は自己ごととして捉えることができ、既習事項の人物は学習の興味関心を高め、「在り方生き方」に関する自覚の涵養に有効であることがわかった。一方、最も抽象的な概念で理解に苦しんでいる様子が見られた4時間目を選んだ理由は、「初めて幸せについて考えたから」、「シンプルに疑問が湧いたから気になった」といった純粋なコメントに加え、「自分にとっての幸せと、周りの幸せは全然違くて、答えはなく、これからも考えながらきたいし、とても難しくて、深く考えさせられた内容だった」、「ただ自分を貫くのがイイと思っていたけど、J.S.ミルの周りに迷惑がかからなければイイという考えに気付かされるものがあった」といった教材を自己ごととして捉えて新たな在り方生き方に関する自覚が生み出されているものがあった。しかしここで注目したいのは、「幸せ」をテーマとした6人が幸せに関する概念を学んだ4時間目を心に残る時間として選択していない点である。本単元の最も重要な要素を含んだ4時間目がどのようにテーマ設定へ活用されたのかについては検討の余地がある。

## (2) 「先生へのお手紙」の内容分析

有効な61枚の手紙の内容を、学習内容に切実性を感じている記述、自己ごととして捉えている記述、支持的風土に関する記述、学習内容や方略に関する記述、それ以外の感想、悩み相談の6項目に分類すると次のような結果になった（表4）。

表4 「先生へのお手紙」の内容分析

内 容 の 抜 粋	切実な問い合わせ（3人）	自己ごと（14人）	支持的風土（5人）	学習方略（10人）	感想（27人）	悩み（2人）					
	【生徒A】 生きるのが辛く生き方がわからなかっただけ、吉田先生の授業を受けて、楽しい授業もでき、その中でどう生きたらいいのかまた、自分らしい生き方について考えたり知ることができて良かったです！	【生徒C】 自分が思う生き方や、歴史上の出来事や今まで続いていることについて考えられました。授業後の生き方で自分の考えが変わったなど感じました。とてもおもしろかったです。	【生徒D】 授業を通して考え方方が変わりました。相手のことを考えて、行動したいと思いました。	【生徒E】 どんな意見にも反応するし、ほめたりするから授業を受けやすかったです。	【生徒F】 わからないけど雰囲気がよかったです！！	【生徒G】 自分の意見を出すのも、クラスメイトの意見を見るにも非常にやりやすかったです。	【生徒H】 先生の授業はグループでやったりして楽しくてぜんぜん眠くならなかったです！	【生徒I】 自分の考える時間をくれるのでとてもたのしかった	【生徒K】 いつもプリントを用意して説明もこまかくしてくれてとてもわかりやすかったです。優しくておもしろいで、楽しく授業を受けることができました。	【生徒L】 最初は小中学校の時みたいにただの教育実習かと思ってたけど、YouTubeを活用したり普通の授業と同じくらい楽しかった。	【生徒M】 普段の授業よりも楽しかったです。
	【生徒B】 授業をする内容は将来的にも考えなきゃいけない事だったので、深く、楽しく、勉強することができました。	【生徒D】 授業を通して考え方方が変わりました。相手のことを考えて、行動したいと思いました。	【生徒G】 自分の意見を出すのも、クラスメイトの意見を見るにも非常にやりやすかったです。	【生徒I】 自分の意見を出すのも、クラスメイトの意見を見るにも非常にやりやすかったです。	【生徒J】 自分の意見を出すのも、クラスメイトの意見を見るにも非常にやりやすかったです。	【生徒L】 最初は小中学校の時みたいにただの教育実習かと思ってたけど、YouTubeを活用したり普通の授業と同じくらい楽しかった。					

生徒A、B（Bはこの文章の次に悩みが記入されていたが省略した）は現代社会に「生きづらさ」を感じて生き方に関する悩みを持っていたが、今回「あなたの思うよい生き方」をテーマとした在り方生き方教育の実践を通して、他者を意識した現代社会に生きる自己の在り方生き方に関する自覚の涵養に繋がったことがわかった。生徒Cは教材と今の自分達とのつながりを見出している点から学習内容を自己ごととして捉えていることがわかる。また、生徒Dは授業前後で考えが変化したことに気づき、

今後の生き方について明らかにしている。このことから、生徒の興味・関心を把握する目的で行った授業前アンケートから教材づくりを行うことで生徒が興味・関心を持って教材と向き合うことができ、他者を意識した自己の在り方生き方に関する自覚の涵養に繋がったことがわかった。支持的風土に関する記述とそれ以外の感想で最も多かったキーワードは「楽しい(18)」「優しい(4)」であった。生徒は、筆者が意識して行った「自己の意見の有効性に気づいてもらえるような返答」や普段授業に参加しない生徒や意見を書き出さない生徒に対して行った「よさを認める声かけ」に優しさを感じ、授業への参加意欲に繋がったようであった。このことから、意見が出しやすい支持的風土の醸成のために「教師が生徒の良さを認めて積極的に伝えていく」ことは有効であることがわかった。生徒H, I, Jの記述から、授業で「自分の考えを持てる場面」と「考えを表現する場面」、「自分の考えと他者の考えを比較する場面」の3場面を意識して取り入れ、リアルタイムで共有できるLiveアンケートの活用は、自分の考えを持って互いの見方・考え方を活かして高め合うことができる授業づくりに繋がるだけでなく、学習意欲の向上にも有効であることがわかった。

## 6. 研究のまとめ（成果と課題）

今回の研究において、授業前アンケートや実態調査から生徒の声を前もって調査し、「切実な問い合わせ」と「支持的風土の醸成」によって、「在り方生き方教育」の授業を作ることができるという仮説を設定した。まず、「切実な問い合わせ」の設定については、「授業をする内容は将来的にも考えなきやいけないことだったので、深く、楽しく、勉強することができました」「生きるのが辛く生き方がわからなかつたけど（…中略…）自分らしい生き方について考えたり知ることができて良かった」といったコメントから、より自分ごととして捉えることができていることがわかる。次に支持的風土の醸成については、「どんな意見にも反応するし、褒めたりするから授業を受けやすかつた」「わからないけど雰囲気がよかつた」「優しくて気軽に話しかけやすかつた」といったコメントから意見の活性化が促されたことが見てとれる。

以上のことから、生徒の実態把握から生徒が自分ごととして考えることができるような「切実な問い合わせ」を設定し、学習内容が深まって生徒の本音が飛び交うような「支持的風土の醸成」を工夫することで、生徒の将来に活ける在り方生き方教育の授業を作ることに一定の効果があることが検証された。ただし本研究の課題としては、教科書の指導内容が網羅できなかったことや一部の生徒には授業内容の理解に困難があったことが挙げられる。今後は、「在り方生き方」における重要な概念や知識・技能を整理して単元の再構成を行うとともに、より1人でも多くの生徒の人生に活ける授業を展開できるよう学び続けていきたい。

## 引用文献

- 伊藤宏之, 2003, 「高校公民科の授業における指導の方法と内容の精選・展開について——『課題解決学習』での教師の役割とは何か」『福島大学教育学部論集社会科部門』(73) : 1-14.
- 中央教育審議会, 2016, 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）」:11.
- ベネッセ教育総合研究所, 2020, 『VIEW21高校版2020年度4月号』, (2021年12月9日取得, <https://berd.benesse.jp/magazine/kou/booklet/?id=5494>) .
- 森永崇行, 2018, 「子供が社会的事象を自分との関わりで捉え、主体的に追究する授業づくり——4年社会科『わたしたちの県・自然を生かすまち——乳牛を育てる島 種子島』の実践を通して (2021年10月30日取得, <https://www.pref.kagoshima.jp/ba04/kyoiku-bunka/school/teichaku/jissennkiroku/h29jissen.html>) .